

ハイデルベルク信仰問答講解説教 13 「本当の自由」(2011年11月20日 礼拝説教)

【聖書箇所】

主の手が短くて救えないのではない。主の耳が鈍くて聞こえないのでもない。むしろお前たちの悪が／神とお前たちとの間を隔て／お前たちの罪が神の御顔を隠させ／お前たちに耳を傾けられるのを妨げているのだ。お前たちの手は血で、指は悪によって汚れ／唇は偽りを語り、舌は悪事をつぶやく。正しい訴えをする者はなく／真実をもって弁護する者もない。むなしいことを頼みとし、偽って語り／労苦をはらみ、災いを産む。(イザヤ59：1-4)

言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。ヨハネは、この方について証しをし、声を張り上げて言った。『わたしの後から来られる方は、わたしより優れている。わたしよりも先におられたからである』とわたしが言ったのは、この方のことである。わたしたちは皆、この方の満ちあふれる豊かさの中から、恵みの上に、更に恵みを受けた。律法はモーセを通して与えられたが、恵みと真理はイエス・キリストを通して現れたからである。いまだかつて、神を見た者はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである。

(ヨハネ1：14-18)

【説教】

先月から特伝や交換講壇、在天者記念会など慌ただしく過ぎてまいりましたが、この秋の一連の行事も一段落して、本日からまたじっくりと落ち着いてハイデルベルク信仰問答の講解を進めていきたいと思えます。今日は、第13主日、問33-34のところを手がかりにして、御言葉に聴いてまいります。

早速、問33に注目します。少しおもしろい問いの立て方をしています。いきなり「わたしたちも神の子であるのに」とあります。わたしたちが神の子であることをすでに自明のこととして感じます。それには理由がありまして、すでに問26、父なる神についての問答のところ、**「わたしたちの主イエス・キリストの永遠の御父が、御子キリストのゆえに、わたしの神またわたしの父であられる」**そのようにありました。キリストによって、神さまはわたしたちの父であられる。それは言い換えればわたしたちが神の子とされているということです。そこにはキリストによる罪のあがないがもちろん示されており、キリストによってわたしたちは罪赦され神さまとの関係が回復されて、神さまを父と呼ぶことができた。「全能の父なる神を信ず」と告白する時、すでにわたしたちはそのような恵みの内に招かれているのです。

更には、前回のところ、問32のところでは、キリスト者もまたキリストの一部となり、その同じ務めを与えられていることが示されました。預言者・祭司・王の務めです。そのようにわたしたちは神の子としてキリストの一部となって、その同じ務めにも生きることができる。ですからこの信仰問答では、ここまでわたしたちがキリストと一つであることを強調してきたと申し上げてよいでしょう。罪赦されて主イエスと同じように神の子とされ、神さまに「父よ」と呼びかけて祈ることができる。そして主イエスと同じ務めに生きるようにされている。それは何よりキリストに結ばれることによって見えてくる恵みであります。このことはとても大事なところであります。キリストとわたしの関係。それはまさに一つなのです。洗礼を受けてわたしたちはキリストに結ばれます。それは当然その同じ命に生きていくこととなります。

ですからパウロは言います。「わたしたちがキリストと一体になってその死の姿にあやかるならば、その復活の姿にもあやかれるでしょう」(ローマ6：5)「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです」(ガラテヤ2：20)そのようなキリストとの一体化こそ、聖書が示す救いの奥義であり、信仰によって与えられる最高の恵みなのです。これを自覚しなかったなら、まず洗礼を受ける意味は見出せません。何のために洗礼を受けるのでしょうか。それは見える教会の一員になるだけのことに留まりません。キリ

ストと一つの命を生きることなのです。キリストは十字架で死に、そして復活されました。わたしたちも洗礼を受けてこれに連なるのです。つまり罪に死に、復活の命に生きること。キリストの十字架と復活はわたしと無関係の出来事ではありません。キリストに結ばれてわたしの出来事になるのです。だからこそわたしたちも神の子です。それは胸を張って言っていることです。

しかし、ここで信仰問答はわたしたちの弱さを知ってか、ここで一つ釘を刺しているというかブレーキをかけています。わたしたちは暴走する。調子に乗るのです。それは神さまの恵みを見失う。神の子とされたことをあたかも自分でなし得たかのように、あるいはまるで最初から神の子であるかのように振る舞う。そういう傲慢さが出てくる。それが人間の弱さです。ですから、そうならないように、ここでは主イエスとわたしたちの本質的な違いが明らかにされています。それはここで扱っている使徒信条の「独り子」という言葉に示されていることです。信仰問答ではこの「独り子」という意味について「キリストだけが永遠からの本来の神の御子」と言います。そこがわたしたちと決定的に違うことです。これはイエス・キリストについて真の神さまと言いつづけていることと同じであります。主イエスは真の神さまですから、被造物であるわたしたちとは質的に違うのです。そこをまずわたしたちは弁えなくてはなりません。そしてこの違い、隔たりを弁えた時にこそ、そこに深い神さまの恵みが発見するのです。そしてこの違い、隔たりを弁えるということが、今日の説教の鍵となります。

神さまはわたしたちにどのように関わられるか。この隔たりを越えて、真の神さまが真の人となられた。イエス・キリストとはそういうお方です。そこに聖書の示す救いのダイナミクスがあります。神さまと人間、この違い、隔たりは明確なのです。それは創造主と被造物、造り主と造られた者、そのような決定的な違いです。越え難い違いがある。しかし神さまがこれを越えられる。わたしたちを神の子とするために。それゆえに信仰問答は言います。「わたしたちはこの方のおかげで、恵みによって神の子とされているのです」わたしたちはあくまでも恵みによって神の子とさせていただいているのであって、それはわたしたちがそれに相応しいからでも、何かそういう素質もっているわけでもないのです。恵みによって、そうではない者がそうさせていただいているのです。主イエスは本来の神の子であります、わたしたちはそうではない。そうではないものがそうさせていただいている。それが恵みです。

先週は、落合建仁先生を招いて特伝を行いました。午後のセミナーでは、先生の研究されている熊本バンドについてお話し

していただきました。とても良い学びができたと思っております。日本のプロテスタントキリスト教の三つの源流の一つがこの熊本にある。それはそれで評価すべきことですが、しかしこの熊本バンドが日本のキリスト教会に混乱を来す要因となりました。それは熊本バンドが、正統的神学、例えば贖罪やキリストの神性を否定する自由主義神学、新神学の影響を受けてしまったことに起因します。これは事実として受け止めていかなければなりません。この熊本バンドの中心的人物に海老名弾正がいます。後に同志社の総長となった人です。先生も講演の中で少し触れていましたが、この海老名と植村正久とのキリスト論争論争というのがあります。植村は横浜バンドの流れ、わたしたちと同じ伝統の流れにある人で、日本基督教会、また東京神学大学の前身、日本神学社を設立した人です。

この論争について詳しくお話する暇はありませんが、一言で言えば、正統的キリスト教信仰と自由主義神学との論争です。植村は正統的な福音理解をもっていました。キリストによる贖罪、罪の赦しを信じる信仰にあった。しかし、海老名は違うのです。彼の説教集がありますが、例えばヨハネ福音書の冒頭にある「光」について「この光が覆れて釈迦の光明となり、孔子の光明となり、またイエスの光明となれる」と述べています。つまり海老名においては、主イエスは釈迦や孔子と並べられ、そこには「独り子」という考えはなく、誰もがイエスのように神の子になれると説きます。しかもそれは神さまによってその恵みによって罪赦されることではなく、自分自身がそのように成長することによって達せられる。そういう神の子たる素質を人間は元々備えていると言うのです。

植村は、この海老名の福音理解について「その救いは仏道の見性成仏に比してそもそも何らの相違ありや」と述べます。仏教徒が自ら成仏することを救いと考えるのとそこにどう違うのか。同じではないか。そうであればキリストの十字架と復活はもはや必要ではなくなる。そう言って植村は海老名の主張を否定します。

この論争に見えてくるのは、海老名にはキリストが神の独り子であるという信仰がないということです。皆がイエスになれる。そういう素質をもっている。だから釈迦も孔子もイエスも同じなのです。彼にとって救いは神さまと被造物との隔たりを神さまが越えるのではなく、こちら側の人間が越えられると考えるのです。その越えられた一人がイエスであり、釈迦であり、孔子である。そういう模範的な人間になりましょう。しかしそれは福音でしょうか。

わたしたちは、イエスは真に神の子であると信じます。しかもイエスだけが永遠からの本来の神の御子なのです。このお方がわたしたち罪の人間のためにその越え難い隔たりを越えて、真の人となられ、罪をさがってくださった。この神さまの恵みだけがわたしたちを救いの源なのです。ここを見失うとわたしたちの信仰は福音ではなくなります。異質なものになります。自分の力で、その素質を磨き、救いに達していくというようなものになります。そうなるとわたしたちはキリストを主と告白することはできなくなるのです。そこでは自分が主になるのです。救いは自分が自分の力で獲得したと考えるでしょう。

このことは問34に関わることです。この神の独り子である主イエスが、神さまであるにもかかわらず、人となられ、御自身の尊い血によって、つまりその命を支払って、罪と悪魔の支配からわたしたちを買い取ってくださった。この「買い取る」というのはあがなうということです。わたしたちはキリストによって、様々な罪の支配から神さまのご支配へと買い戻された。そのために神さまは独り子を世に与えられる。越え難い隔たりを越えて、この罪の世に御自身を与えられるのです。そこではその独り子が十字架の死を引き受けられます。わたしたちを御自分のものとしてくださるために御自身の命を投げ出されたのです。

そこに、わたしたちがこのお方を主と呼ぶ根拠があります。主イエスは真の神さまであるにもかかわらず、真の人となられ、

わたしたちの罪を全部御自身に引き受けられました。それでわたしたちは罪から救われたのです。だからこそこのお方にわたしたちは従っていくのです。このお方のものとされることを喜ぶのです。このお方のものであることは、他の何のものにもはや支配されないということです。この世のあらゆる支配、束縛から自由です。もはや自分からも自由なのです。

いや、自分はこれで充分自由である。何ものにも縛られていない。そう考えるでしょう。確かにわたしたちの国は表面的には自由な国でしょう。自由に表現したり、国家に対して自由にものを言ったりすることができる。でも見えないところでわたしたちは様々なものに支配されている。この世の価値観、人の顔色、社会的体裁、病気になるれば死の恐れ、不安に支配されます。そして何よりわたしたちはこの自分に支配されている。自分という主人に支配される。自分の考えやこだわりを支配されている。自分の考えを改めたりすることを嫌います。指摘されるとかえってむきになります。自分を曲げない。あくまでも自分の主義主張を通そうとする。それは自分に支配されていることではないでしょうか。柔軟ではないのです。

そう考えると、神さまは真に自由であります。神さまが神さまであることを捨てるようにして真の人となられた。この越え難い隔たりを越えること。これはまさに自由の極みではないでしょうか。そして自らの命をささげて、御自身の愛をわたしたちのために注ぎ尽くしてください。神さまはそのような真の自由をもってわたしたちに関わってください。

人間も、この神さまの似姿として造られました。それは神さまと同じこの自由に生きることができるとして人間は造られたということでもあります。それは進んで他者のために自分を捨てることのできる自由です。最後まで自分を貫くことではない。それが自由なのではない。それは自分に縛られているだけのことです。他者のためなら、進んで自分を捨てる。自分が犠牲になって相手を生かすことができる。これこそが本当の自由です。その自由に生きる時に、わたしたちの関係もまた新しくされるのではないのでしょうか。

その自由を与えるために、神さま御自身が自らを捨ててくださった。その自由をもって、わたしたちに仕えてくださった。それがイエス・キリストであります。このキリストによって人間は神さまの似姿に回復され、この自由に生きることができるようです。この与えられた真の自由をもって、喜んで主に従う者でありたい。来週からアドヴェントです。この越え難い隔たりを越えて、神さまはこの世に来られ、真の人となられました。このクリスマスの出来事を感謝しつつ、備えをなしてまいりましょう。お祈りをいたします。

天の父。あなたは、わたしたちをあなたの似姿とするために、この越え難い隔たりを自ら越えて、わたしたちのところにきてくださいました。この恵みを感謝します。主の御名によって祈ります。アーメン。